

## 02 修士設計

開講年次：博士課程前期課程 2 回生

宮本佳明賞

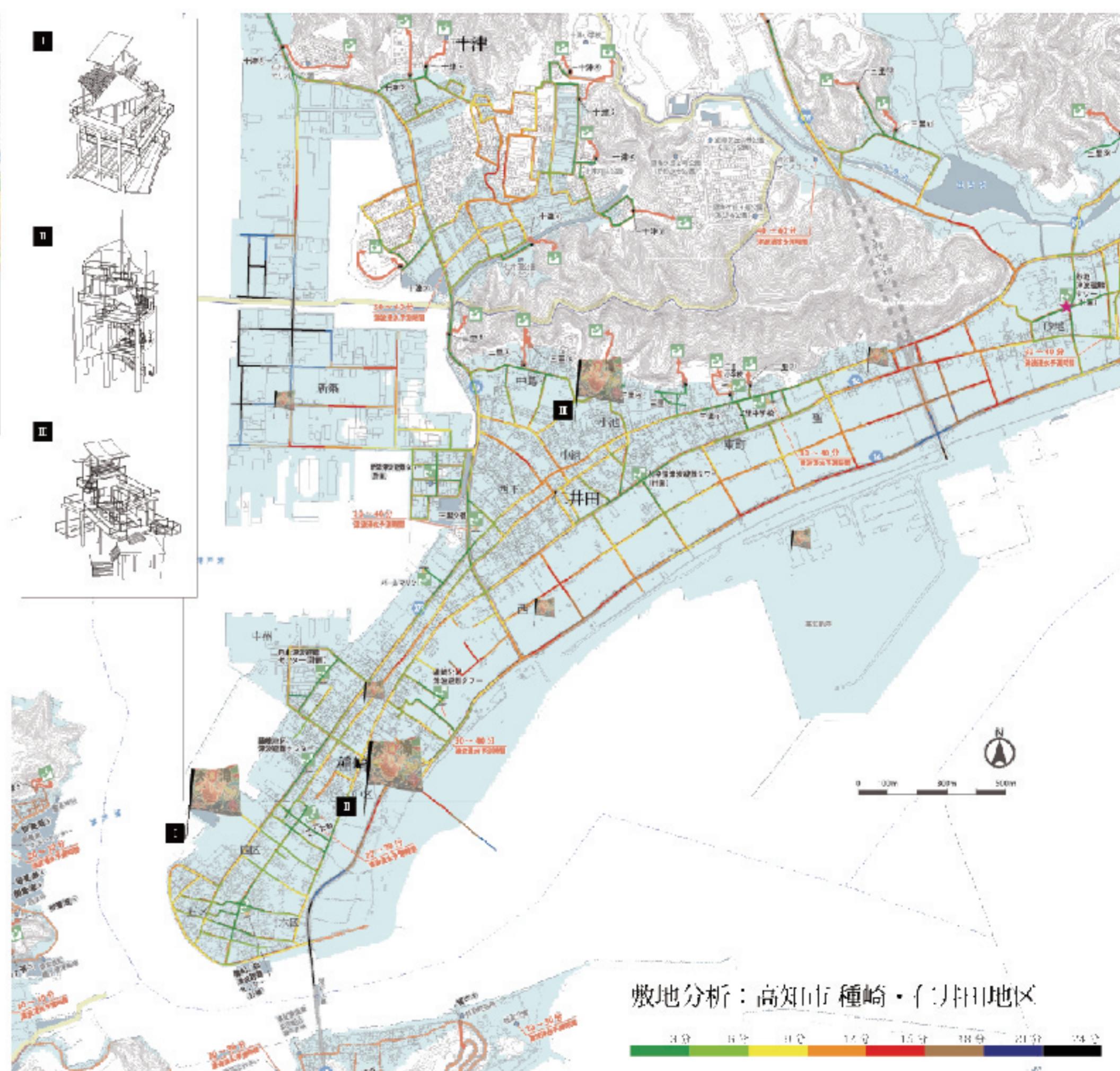
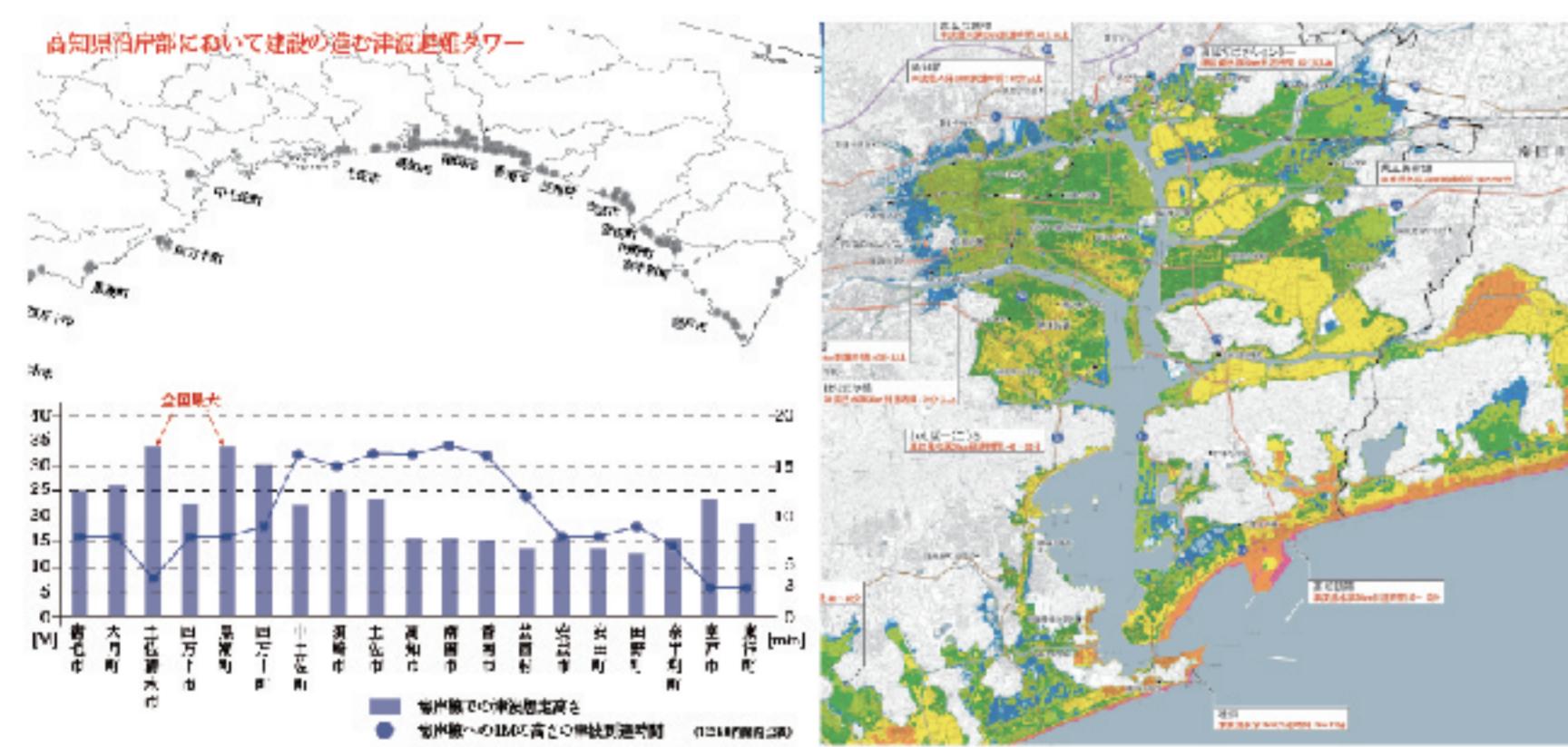
## 災害と暮らす共同体景観の設計

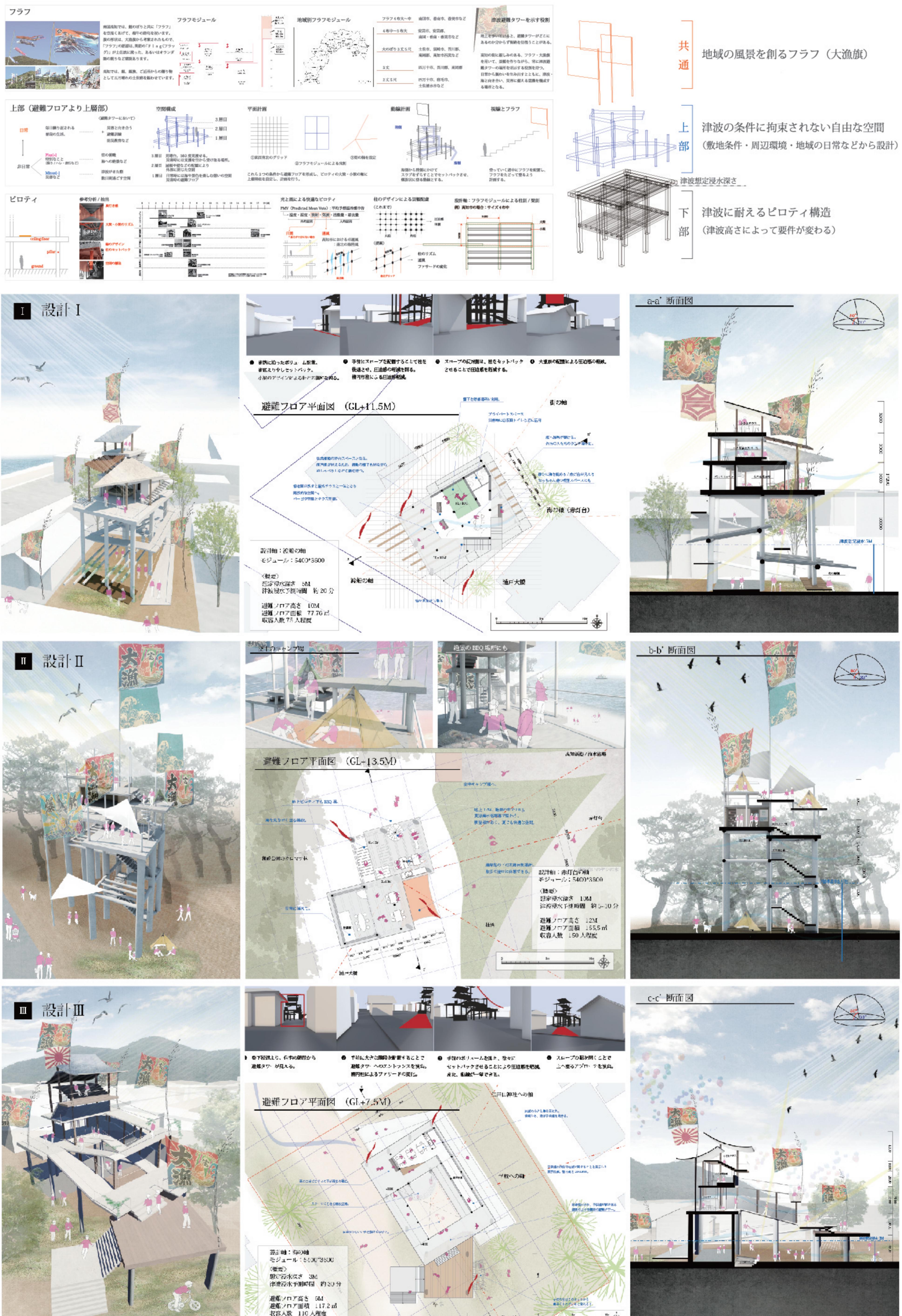
—高知県高知市種崎・仁井田地区における津波避難タワーのモデル構築を通して—

岡実侑（楓橋研究室）

近い将来、高確率で発生すると言われる南海トラフ巨大地震、それによる大津波に備え、対象沿岸地域では津波避難タワーの建設が進められている。3.11以降、高知県においても避難タワーが早急に建設されており、115基が完成した今、避難タワーが沿岸地域の風景を形成しつつある。日常においては無用の構造物となっている現在の避難タワーに対し、建築的観点から地域の日常や景観に重きを置いた避難タワーの新しいビルディングタイプを提案する。そして、これら避難タワー軍により、共同体景観「海に立ち向かう風景」を形成することで、日常的に海に向かい、防災意識を醸成するような避難タワーを設計した。

古くから海に立ち向かってきた高知県で、  
口頭的に海や災害に向き合える場を創り、陸において、  
津波避難タワーにより海に立ち向かう共同体景観の形成を目指す。





## 自動運転時代の到来で新たな次元を獲得する都市と建築の設計

塚越仁貴（遠藤研究室）

自動車が都市の主役となってから100年がたち、新たな時代を迎えようとしている。自動運転(AVs)時代である。また、AI(人工知能)やVRは、人々の生活活動から建築や都市の姿までを大きく変える可能性がある。

かつて、ル・コルビュジエが自動車の登場にすぐさま反応し、ヴォアザン計画や輝く都市などの一連の都市計画で自動車時代の都市と建築の姿をあり方を描いたように、次なるAVs時代の到来を見据え新たな建築と都市の姿を提示する。



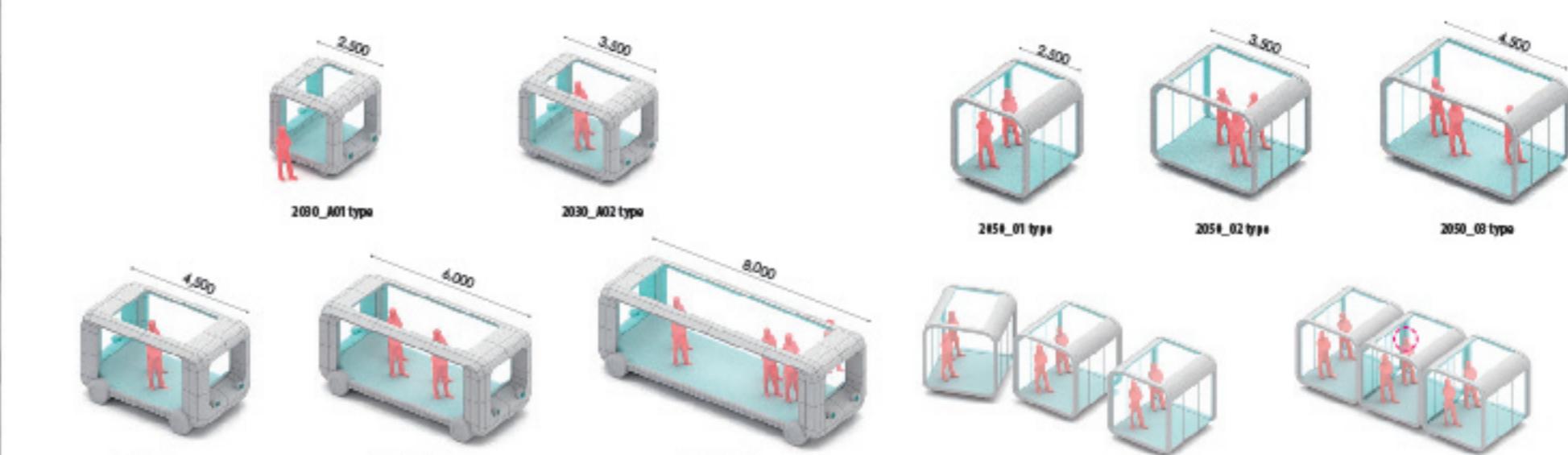
L : 都市

新たな道路ネットワークのルールのもとに、自動車時代から AVs 時代の到来を象徴する新しい都市の未来像を提示する。



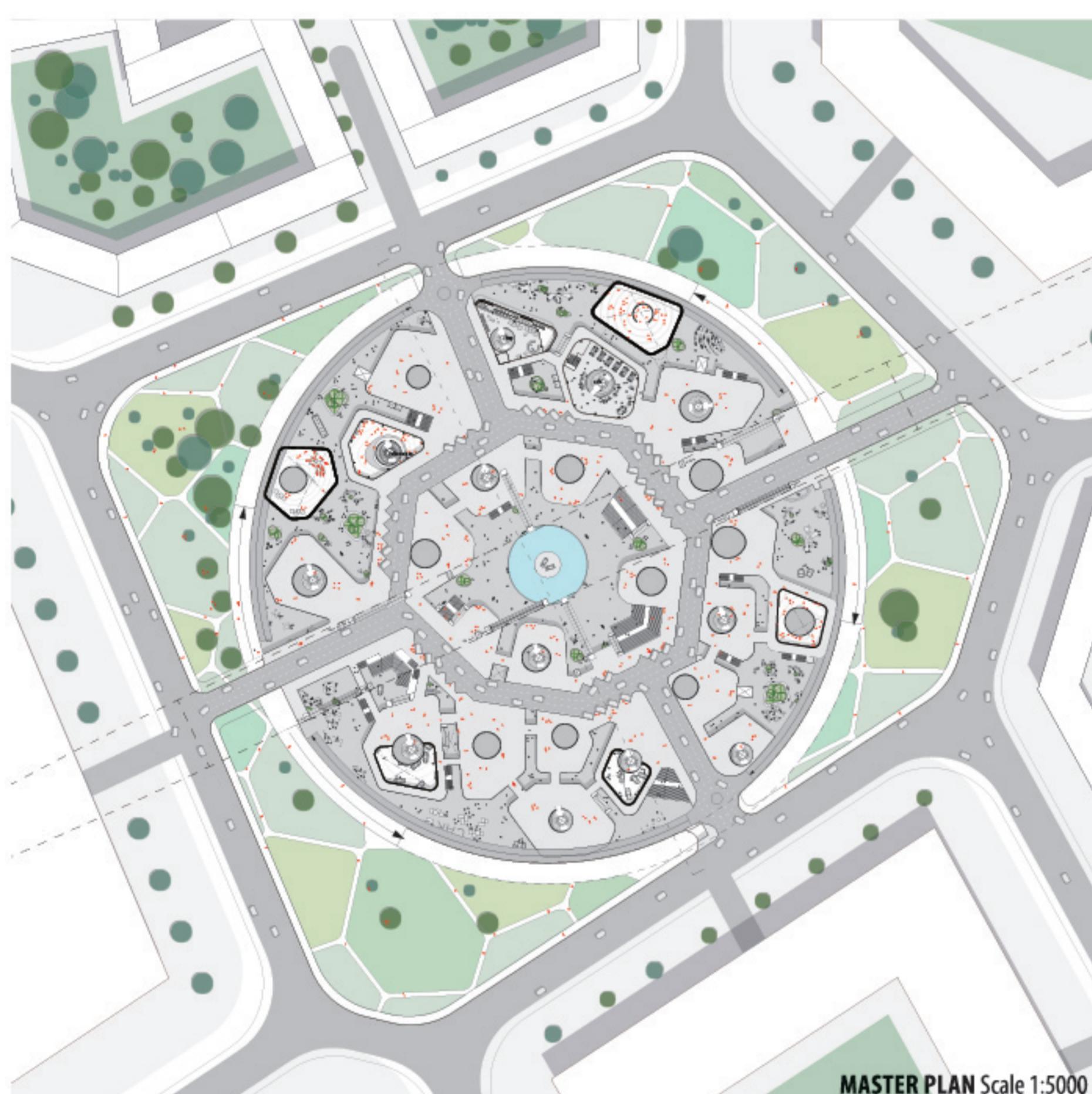
S : AVs モビリティ

都市を構成する最小単位となる AVs のモビリティ像として 2030 年型と 2050 年型の姿を示す。

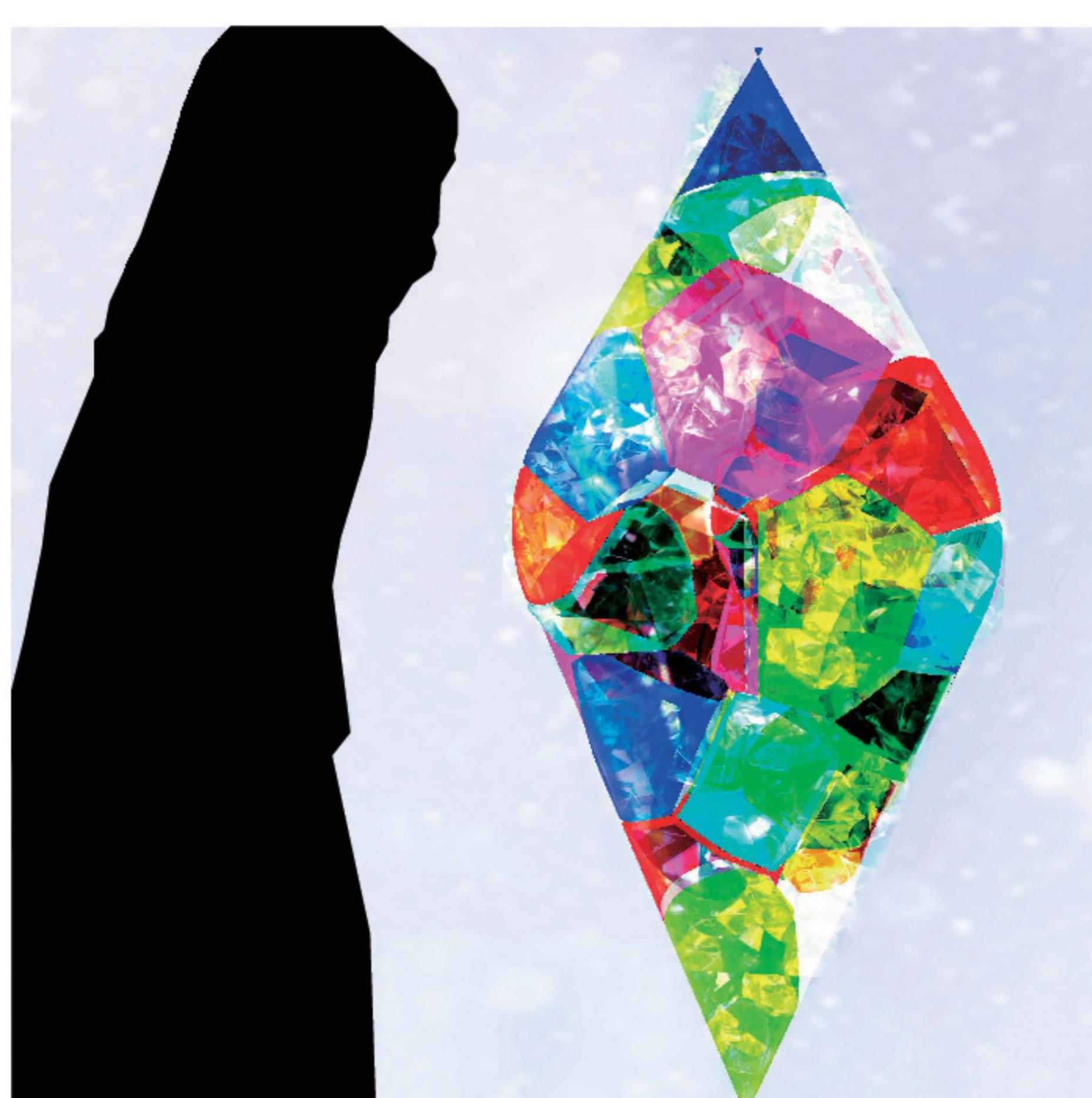
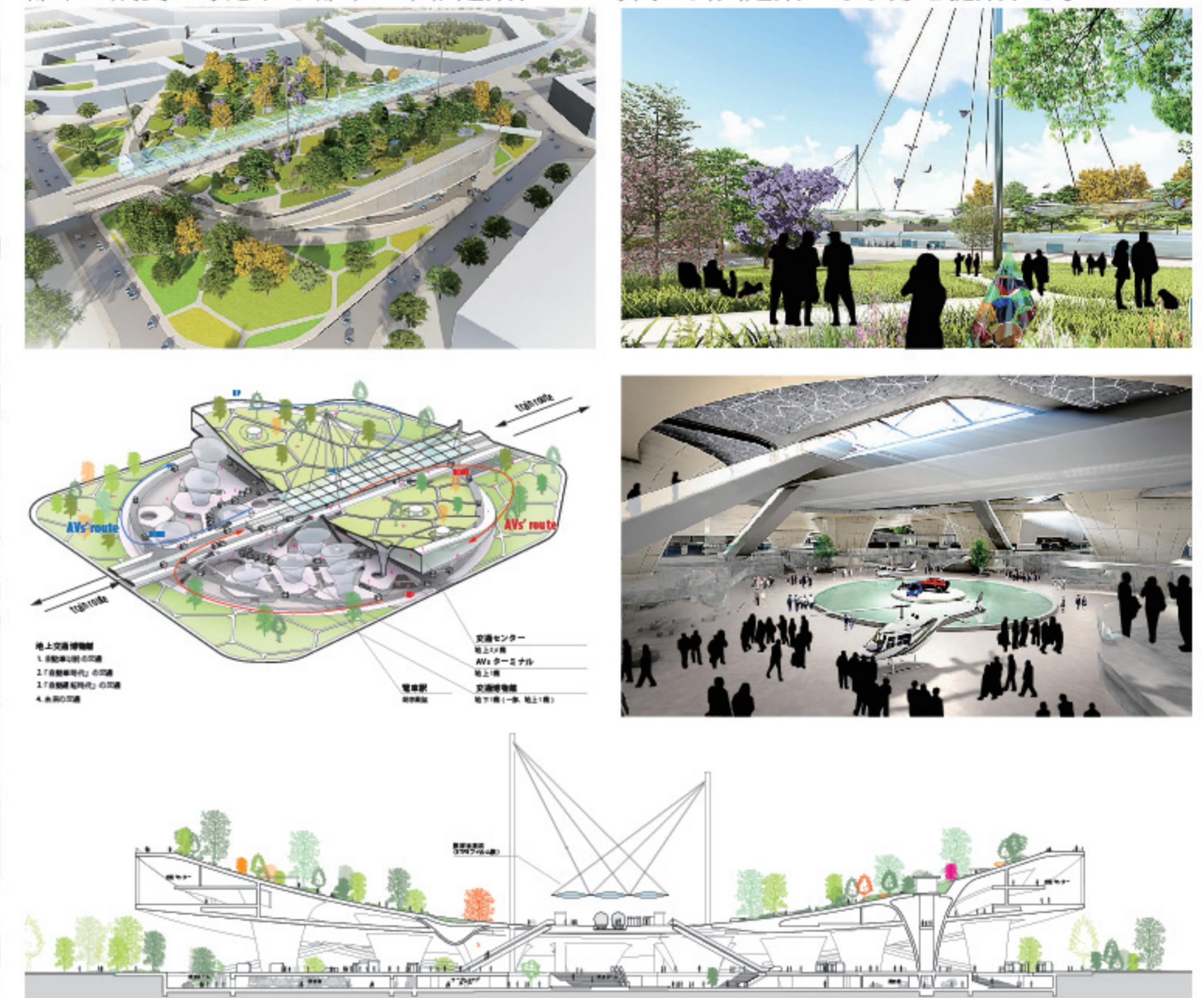




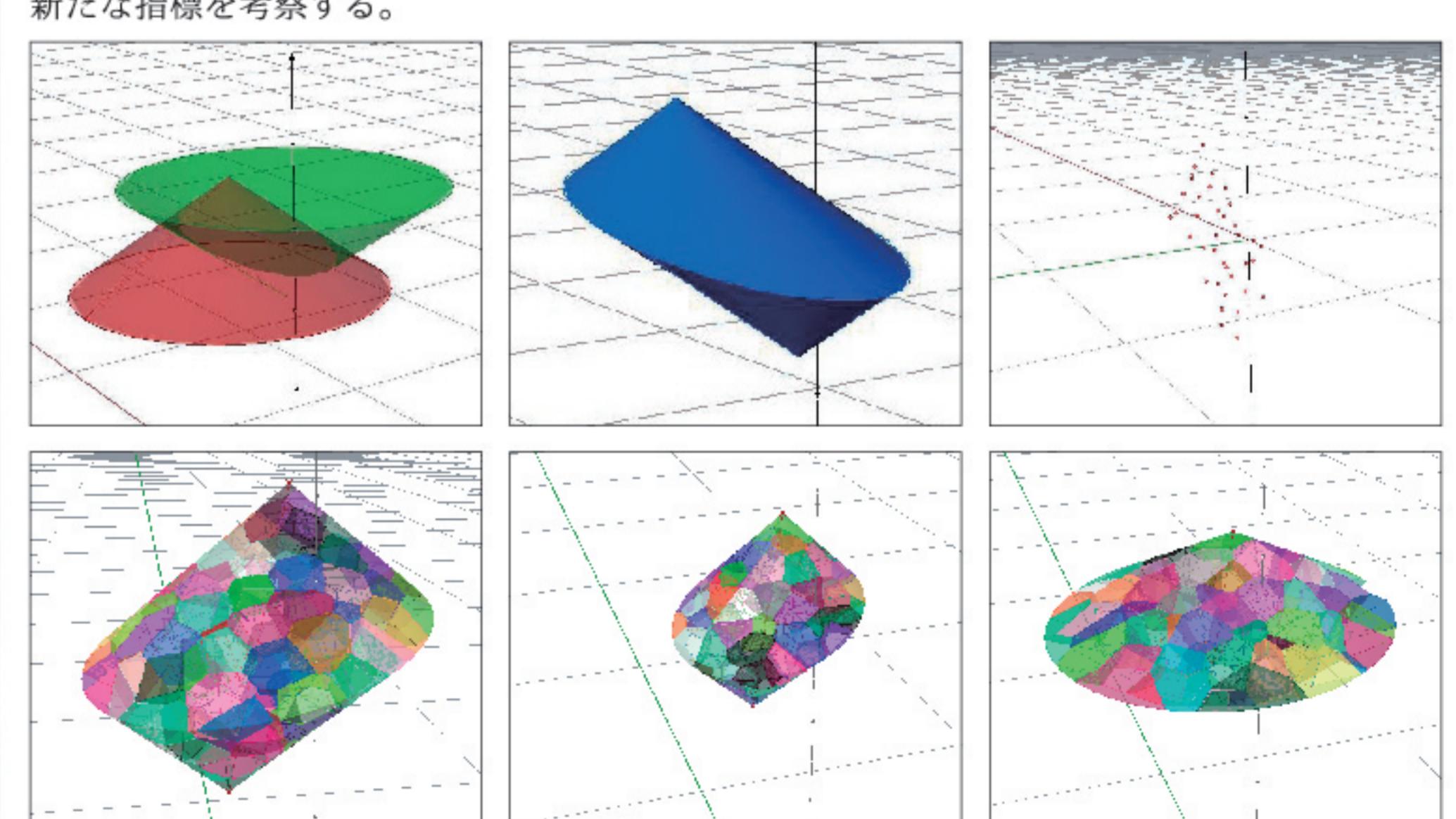
**M1：集合住宅**  
VRなどの普及に伴う就労形態の変化によって、自宅は再び生活活動の中心の場所となる。



**M2：公共複合施設（駅+交通センター+交通博物館）**  
都市の成長に呼応する都市の中枢建築、AVs時代の公共建築のあり方を提案する。



**T：時間都市**  
AIや自動運転によって、人々は最適化された活動や行動を選択することが可能となる。その一方で、都市の豊かさとは行動の最適化ではなく、選択可能な行動の多様性であると考える。移動の転換期である AVs 時代の到来を見据え、都市と建築とその多様性を評価する新たな指標を考察する。



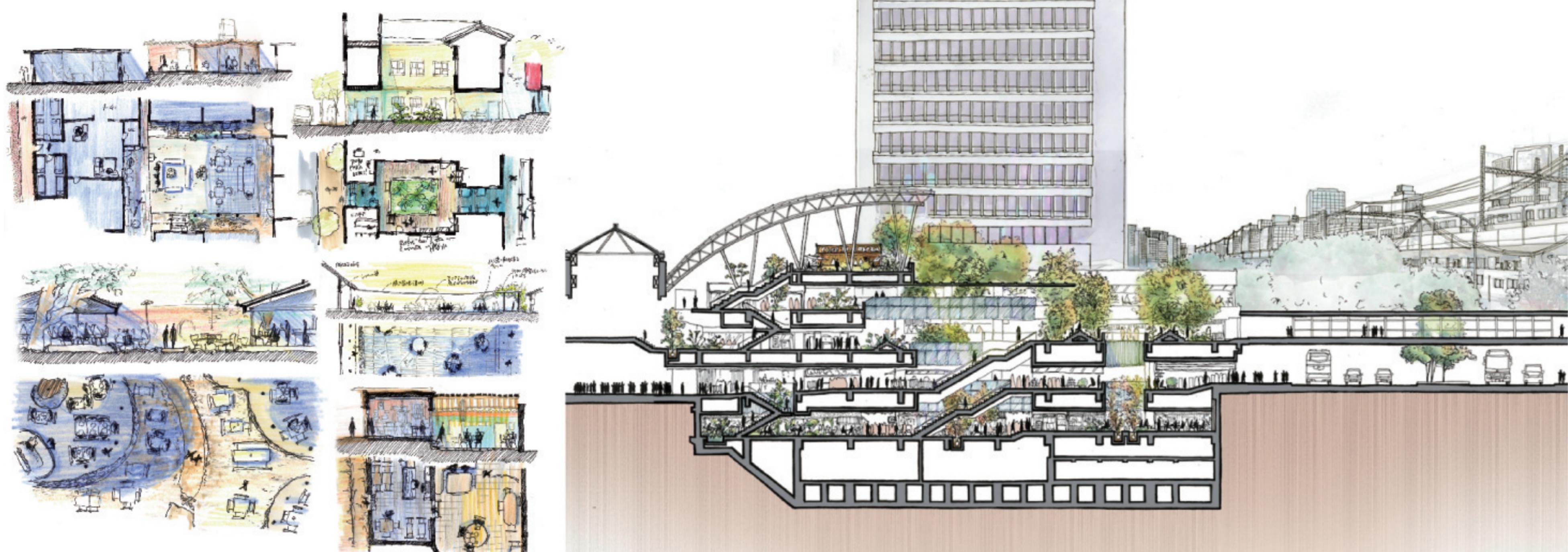
行動の制約や移動速度から構築されたヴォリュームは、即ち「ある人物の意志と制約から構築されるその人物のための都市(4次元都市)」ということができる。

時間都市モデルは、都市や建築の新たな評価の指標となる可能性があるだけでなく、時間の価値が向上した未来において、たとえばスマートフォンのアプリケーションなどでは、人々の都市生活の選択と決定を助ける重要なインターフェースの基本概念にもなりうる。

## 都市の往来環境における速度変化点の設計 一チリの公共空間における建築内外の関係性の研究を通して一 馬場智美（遠藤研究室）

南米チリでの230日間の生活の中で、都市の往来環境において空間の利用者が建築内外の関係を自由に編集し、気候や環境に応答した公共空間づくりの地域性を感じた。それらの空間構成要素を類型化し、往来における人々の行動速度と速度変化点の観点から評価することにより、

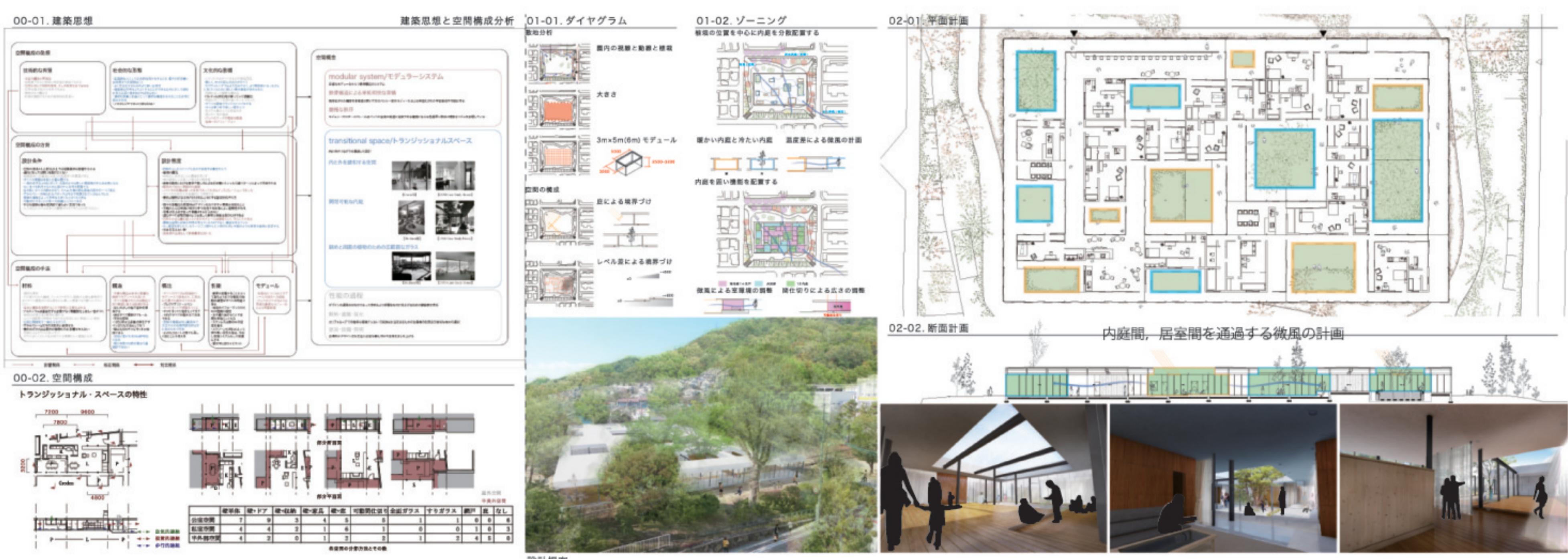
移動のみに空間の目的が終始している日本の都市の往来環境に対し、多様な行動速度を持った活動を誘発する公共空間の再編手法を提案する。ケーススタディとして、速度変化点がなく行動速度が一様な神戸市三宮のさんセンタープラザに改修設計提案を行う。



## 『SUBSTANCE AND FUNCTION IN ARCHITECTURE』にみる ラファエル・ソリアノの建築思想とその空間構成に関する研究及び設計提案 伊藤大輝（未包研究室）

ラファエル・ソリアノの普遍性と地域性を融合し、内と外のつながりを意識した空間構成手法の活用を主旨とする。現代の日本においても、豊かな建築空間をつくりだす上で内と外のつながりをどのように計画するかということは、建築設計での大きなテーマである。そこで時代的背景や日

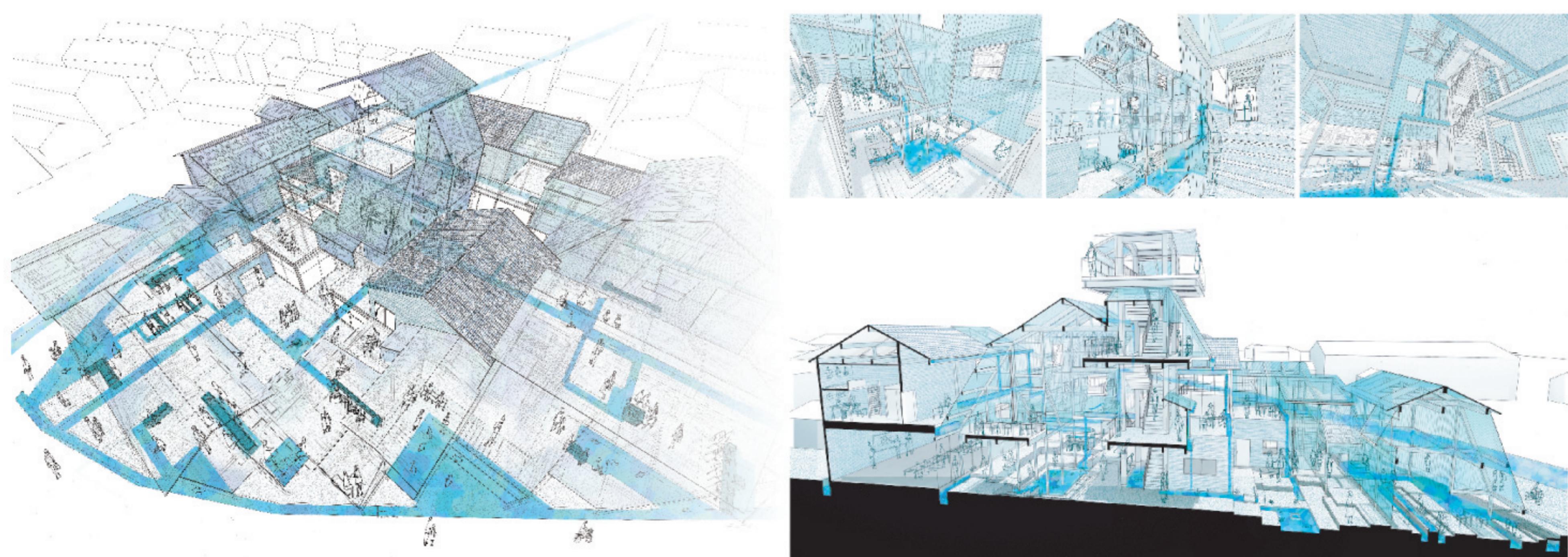
本とカリフォルニアの気候、生活様式の違いを参照しながらソリアノの建築思想と空間構成手法に対する現代的解釈が反映された新たな空間を提案する。鶴甲公園の用地の一部を想定し、阪神間の都会的な側面と六甲山の麓で自然豊かな2つの側面を最大限に生かした設計提案を目指す。



## 集落空間における共同利用型水循環システムを応用した集落センターの設計 一滋賀県高島市針江集落を事例として一 大崎真幸（楓橋研究室）

湧き水が豊富な針江集落では水を大切に扱う文化が継承され、住宅内にカバタと呼ばれる湧き水を利用する台所としての集落特有の伝統的生活空間をもつ。しかし上水道の発展以降、その湧き水を利用するカバタ文化は風化しつつある。そこで個人の閉ざされた台所であるカバタを開

放し、カバタが共同利用できる生活体験型長期宿泊施設を提案する。そこで宿泊者はカバタによる新しい生活体験をし、宿泊者と住民の交流によってカバタの新しい使われ方と文化継承が行われる。

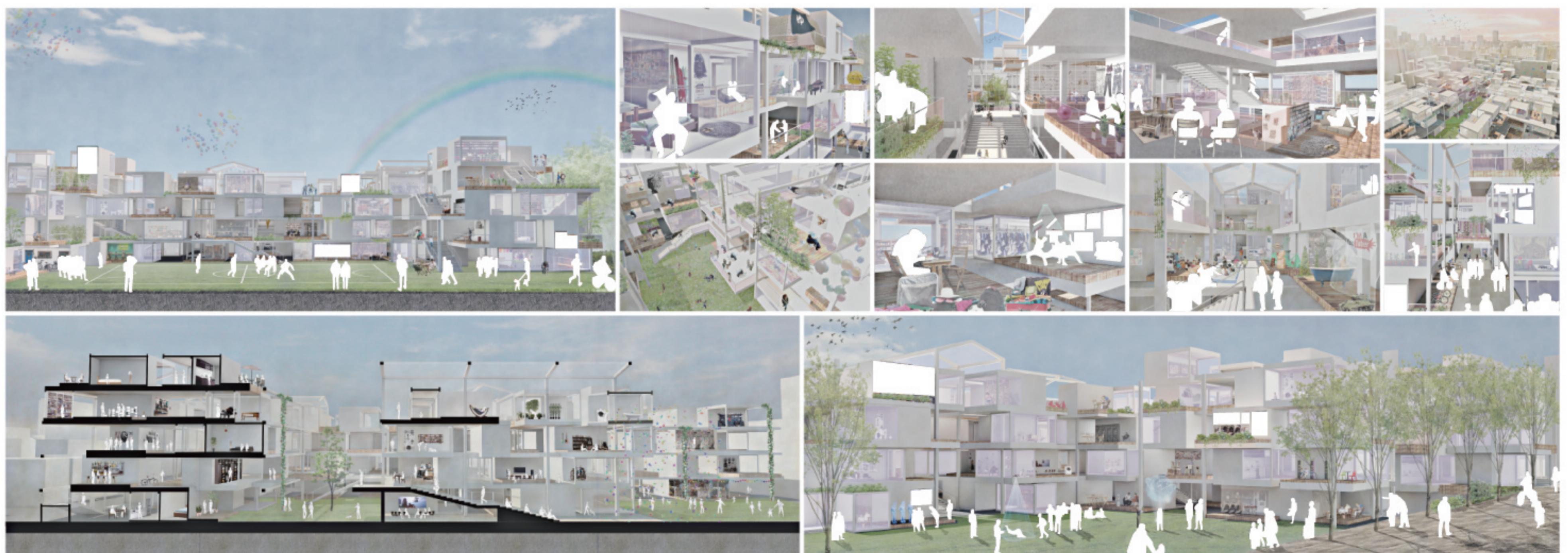


## 参加型景観を形成する「あふれだし」による集住体モデルの設計

加藤駿吾（楓橋研究室）

人の行為や活動が視覚的に景観に参加する参加型景観を形成する集合住宅モデルを提案するにあたり、新たな専有部ユニットを6つ提案する。各戸は外から見えない、閉じた「プライベートボックス」、屋外の居場所をつくる「あふれだしのステージとなるテラス」、見えるけど触れな

い「あふれだしのショウウンドウとなるガラスボックス」の3つの空間を持つユニットで構成される。ありのままの自己や生活をさらけ出し、公開することが世間に受け入れられ、それが職業にまでなる時代の自己を表出し、より見える化された建築や都市の実現に向けての集住体モデル。



## 都市空間につながる水辺の再構築－毛馬桜ノ宮公園一帯におけるワンドを用いた公共空間設計を通じて－

川添浩輝（楓橋研究室）

都市の河川空間は、交通インフラによって蓋をされ、閉ざされた場所が多い。また、均一な緑が広がる都市には、自然による新たな潤いが必要だと感じる。大阪の毛馬桜ノ宮公園一帯を敷地に、ワンドとレインガーデンを使った公共空間の提案である。レインガーデンを用いて、街から

河へ緑を誘引し、ワンドとのコネクション空間を設計する。新たな水のプロセスをデザインし、人と街、人と緑、街と緑の新たな関係性を築きあげ、一体的な空間となり、敷地周辺に緑が波及していく事を目的とし設計を行った。

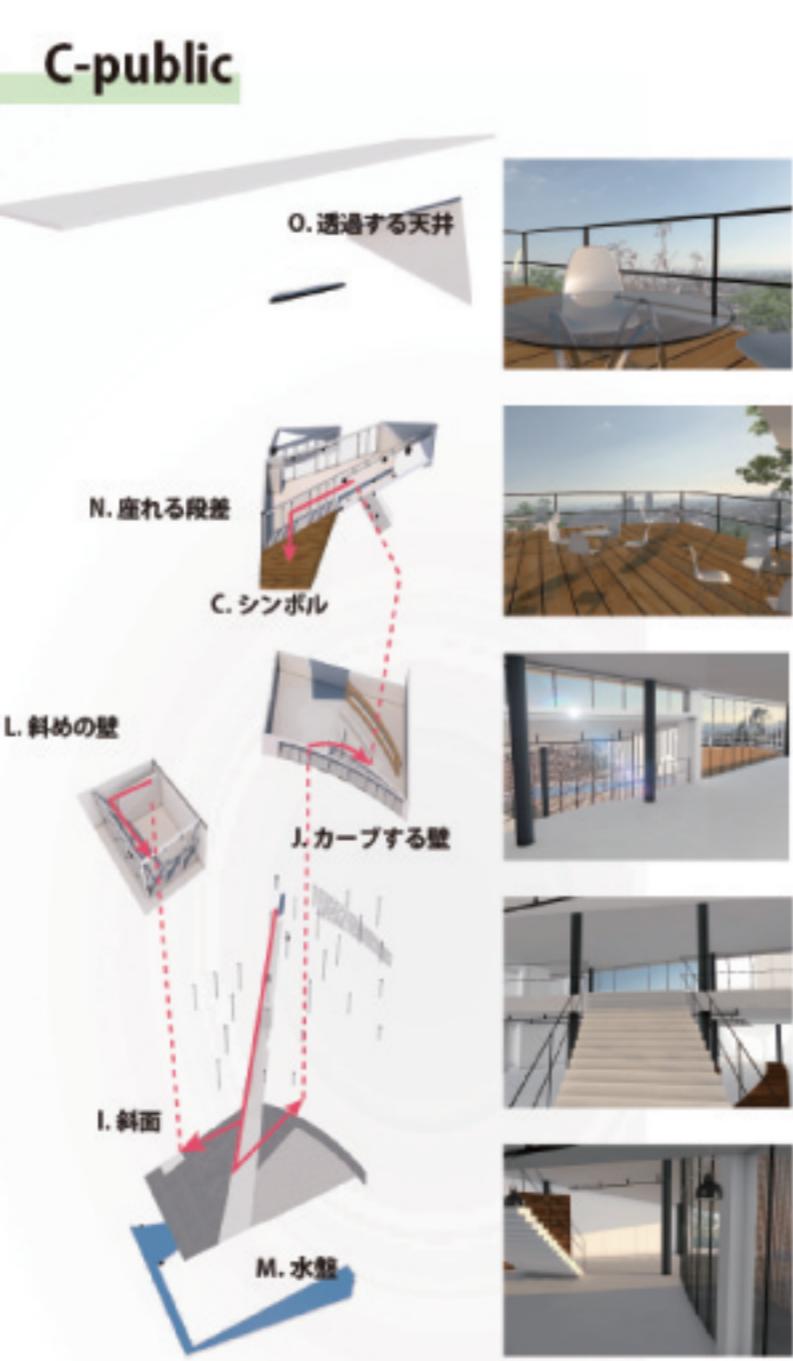
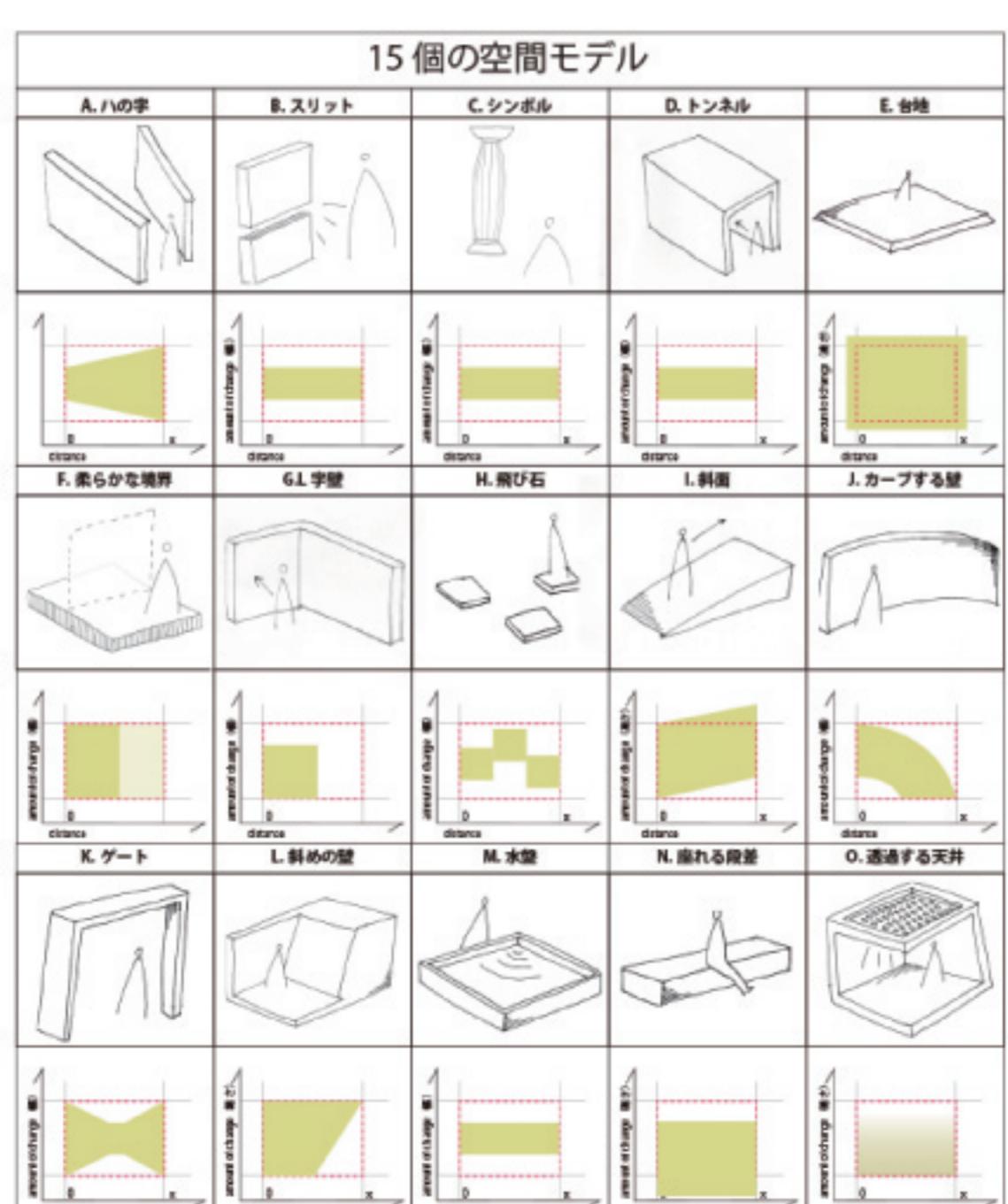


## 身体感覚に基づく公共空間の設計－私的空间体験の分析を通して－

楠満葉（遠藤研究室）

文化人類学者 EDWARD T. HALL (1914-2009) は、自著『かくれた次元』(1970) で、日本人は、独自の空間観念を持ち、それは、日本人の身体全体を感覚機関とした空間認知の方法によるものであることを述べた。HALL も述べる身体全体の感覚こそ、日本人のためのコミュニ

ケーションが生まれる場や、居心地の良さを感じる空間の手がかりであると考え、私的空间体験を記憶を蓄積する身体で評価と分析を行った。そこから導き出された空間モデルを用い、身体感覚に基づく空間の提案を行った。

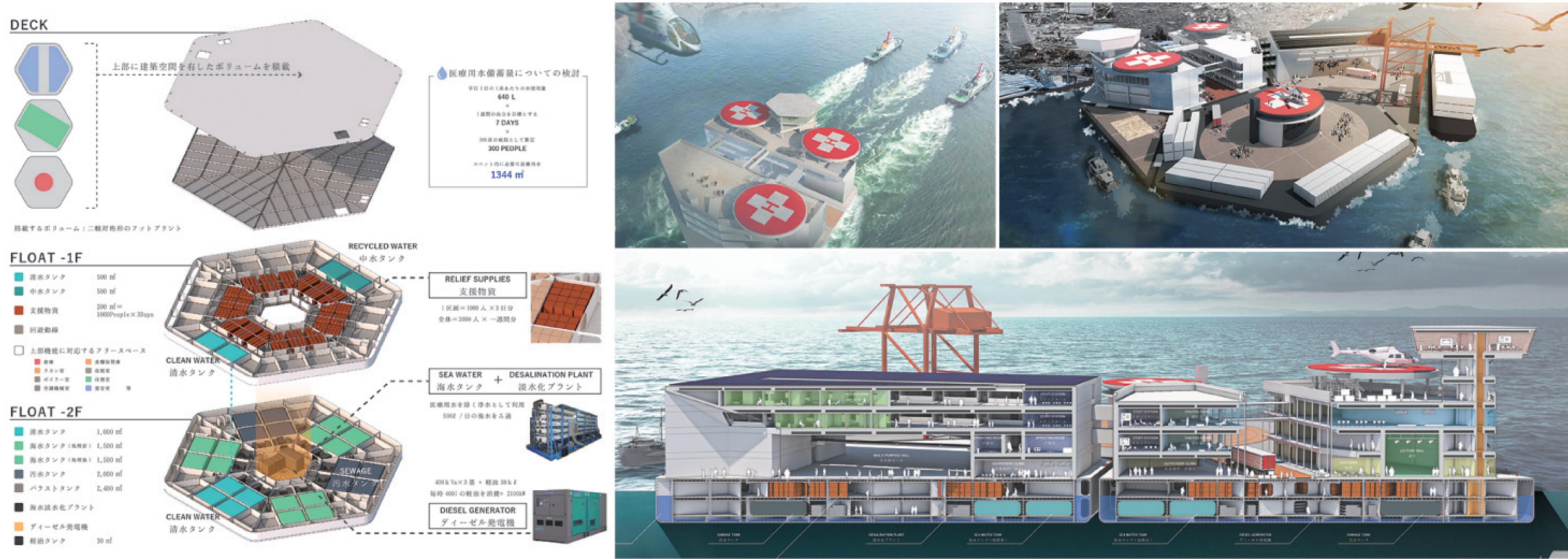


## 浮体式洋上減災拠点の設計

小林諒（遠藤研究室）

近い将来確実に発生する大規模自然災害に対して、洋上に浮かび一定期間の自立が可能な「浮体建築」という新たな枠組みによる減災拠点の設計提案を行う。阪神淡路大震災や東日本大震災における港湾エリアの重要性や水運の活躍手がかりとしつつ、現在日本に複数基配備されて

いる広域防災フロートや 2000 年のVLFS 実証実験、病院船構想などの調査から、減災拠点となり得る浮体建築の在り方と運用について提案。洋上で自立可能な建築を実現する為の具体的な規模算定と共に災害時医療・災害物流に対して一定の有用性を示した。

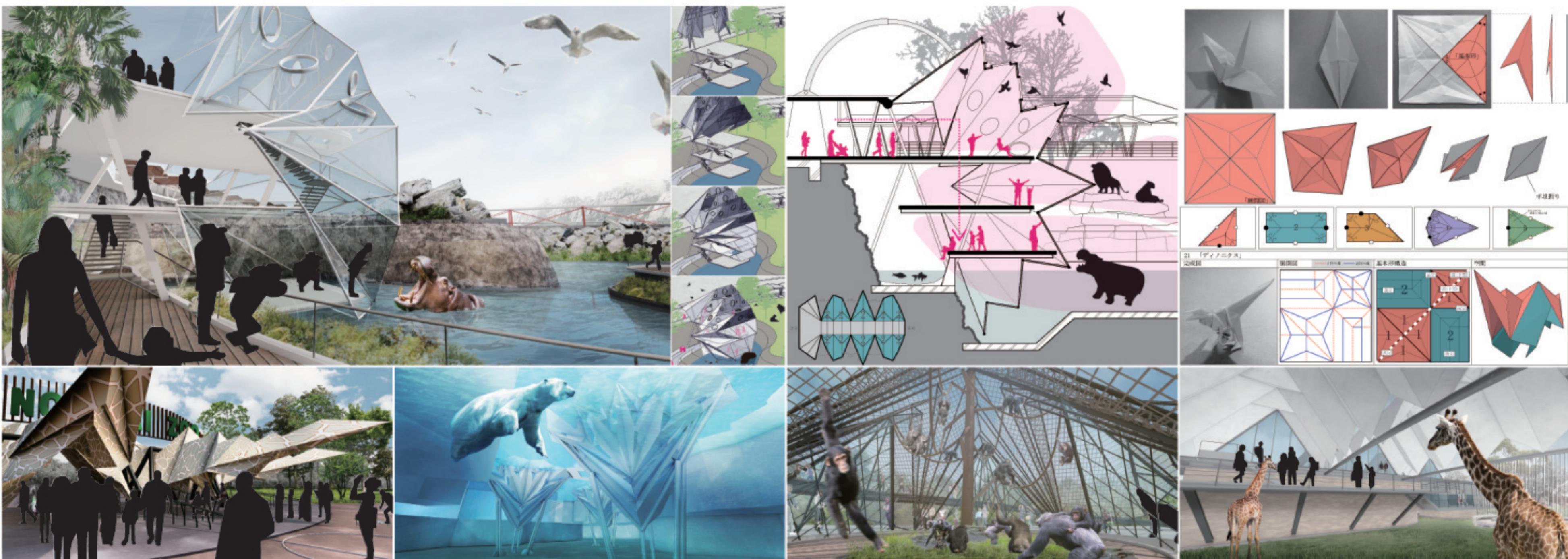


## 創作折り紙の手法を用いた可変建築の設計

松田星斗（遠藤研究室）

日本発祥の折り紙は、その芸術性の高さや数学的特性から世界中で研究・実践が行われてきた。私はその中でも展開図（紙面の折り目）を設計して目的の形をつくる創作折り紙という分野に着目した。創作折り紙の特長は、複雑な形を平坦に折りたためることである。本研究では、折り

紙作品の分析を通して展開図の設計法を明らかにし、折り目が生み出す空間を考察することで、創作折り紙の建築設計への応用体系を示す。また設計においては、多様な造形と折りたたみによる空間変化で、外部環境に対してインテラクティブに反応する可変建築を提案する。

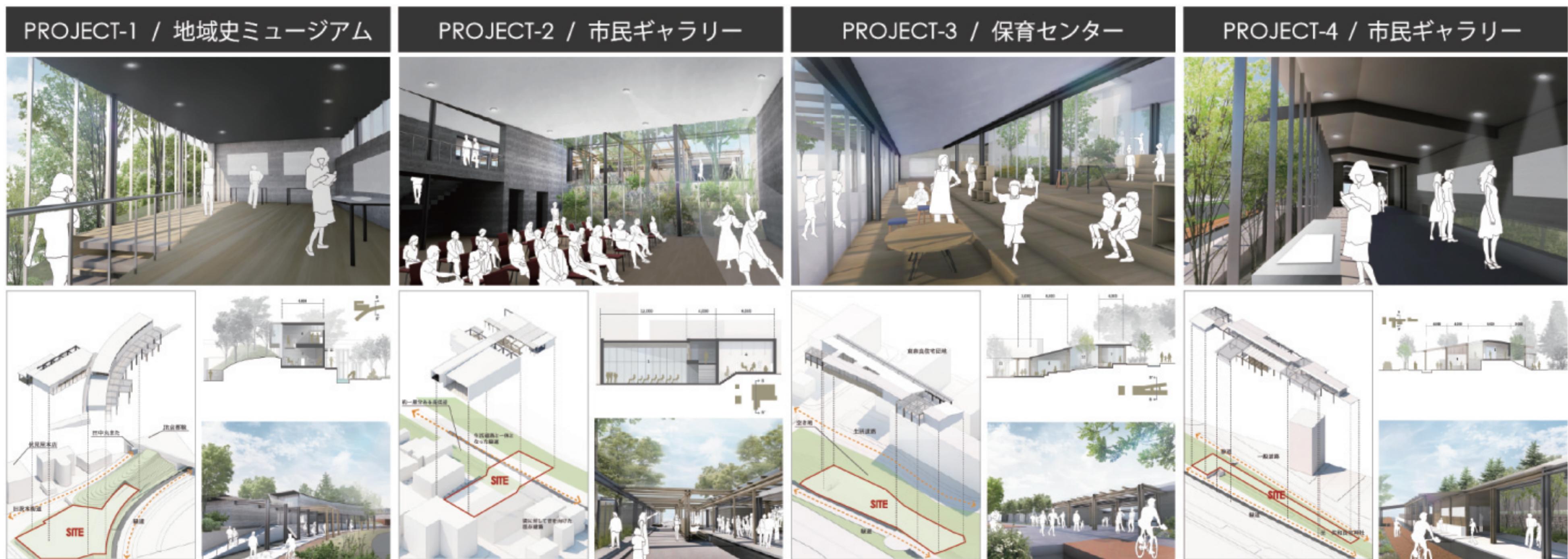


## 天井川の跡地を活かした街の拠り所の設計 –市街地にある川やその跡地における活用事例の研究を通して–

山本修大（遠藤研究室）

近い将来に日本が迎えるであろう人口縮退期に地方都市が地域らしい風景を獲得しながら計画的に街を縮小させる街づくりの手法として、市街地にある川やその跡地に残る地形の痕跡や人の活動の記憶を丁寧に調べ活用することで、地域に根ざした新しい公共空間を

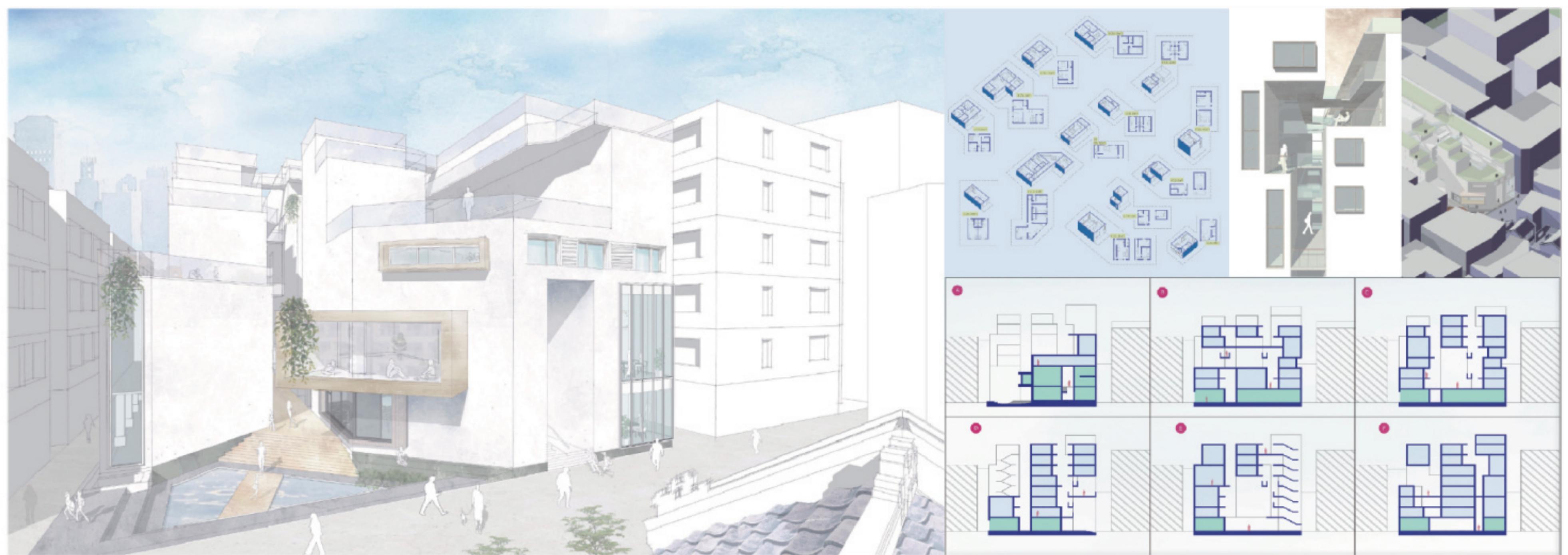
設計することを目的とした。そこで、大阪府茨木市にある茨木川跡地を対象として、かつて天井川であった痕跡として残る堤に対して更新が予想される既存公共施設のプログラムを与え、建築空間として再構築した 4 つの拠り所を提案した。



## 中国広州の「城中村」における複合型集合住宅の設計 –高密度空間における住環境設計手法の考察を通して– 王敬妍（遠藤研究室）

中国の経済先進地域において急速的に都市圏が拡大する中で、市街地に取り込まれる既存の農村は、城中村と呼ばれる。交通や家賃のメリットによって低所得者や出稼ぎ労働者が集まって暮らす地区となってきた。大部分の城中村は公共空間不足・過密な住宅配置・インフラ整備

不足など問題が存在する。世界中における同じような高密度空間に運用される住環境を改善する手法を考察し、広州市最大城中村「石牌村」を対象にして、「狭い立地でも、光や風など自然要素を室内に取り込める」集合住宅の設計を行った。



## 中国の都市生活者の健康向上させる場の設計 –中国古典庭園における「廊」を中心とした空間の研究を通して– 李未萌（遠藤研究室）

現在の中国の都市生活者たちは、人工物に囲まれ、自然から切り離された。大気汚染などの環境問題を深刻に受け止め、体だけでなく、心の健康も欠けている。これからどんどん加速していくハイペースな生活に対し、自然との接し方を再考し、都市生活者の健康を改善できる空間を

検討するのが一つの重要な課題となる。本研究では、中国古典庭園における「廊」の概念に着目し、江南の数多く有名な庭園の観察調査をもとに、「廊」空間をダイアグラム化し、整理・分析することで、設計言語を中国都市の敷地に展開し、具体的な設計を行った。



## ■修士設計講評会の様子

- [日時] 2018年12月29日(土)
- [場所] 自然科学棟3号館125号室
- [担当教員] 遠藤秀平(教授)、末包伸吾(教授)、楳橋修(准教授)
- [ゲスト講評者] 宮本佳明(大阪市立大学大学院教授)

